



幸手市マスコットキャラクター
さっちゃん

幸手市郷土教材資料Ⅱ

道徳のまちさつて

— 未来を生き抜く子どもたち —

幸手市教育委員会

【目次】

○本教材の趣旨と活用の仕方

《教材》

- 「学校たんけん」 【小学校低学年】
- 「届け、祭り太鼓」 【小学校中学年】
- 「温暖化は、ぼくのせい？」 【小学校高学年】
- 「道德の窓」——俳句の文化を広めた中野三允——
- 「一株のあじさいから」 【中学校第一学年】
- 「あかね色の空」 【中学校第二、三学年】

協力者・編集委員

本教材の趣旨と活用の仕方について

【本教材作成の趣旨と教材に込める思い】

本市では、子供たちの実態を踏まえ、各学校において、「生きる力」のバランスを考慮した教育活動を実施している。その教育活動を支援し、さらに充実させるために、「知の面」では、教育委員会主催による「学力向上推進協議会」があり、「体の面」では、「体力向上推進委員会」がある。特に、「心の面」の施策として、「幸手市道徳教育推進協議会」を実施して、話し合ったり、また、本市独自の郷土資料「道徳のまち さつて」を作成したりして、市内全小・中学校で活用しているところがある。

令和に入り、デジタル技術が急速に発達している中で、学校を含め、児童生徒の生活が変容している。未来を生き抜く子供たちの心のさらなる教育のため、既存の幸手市郷土資料では掲載しきれなかった幸手市に残る語り継がれるべき歴史、文化遺産、先哲の教え、地域人材等に改めて着眼し、追加編制版として作成することとした。内容は、幸手市の郷土や歴史、幸手にゆかりのある人物等に関する内容を取り扱いながら、子供たちに身近な話題等を掲載することで、興味・関心を高め、道徳的価値の理解を一層深めることができる授業を実現するものとする。本教材を通して、児童生徒がねらいとする道徳的価値についての理解を自分との関わりで深め、様々な視点から多面的・多角的に考えられるように作成した。

市内小・中学校の先生方においては、このような郷土教材

資料作成者会議委員の思いを汲んでいただき、幸手市のごどもたちのために、指導法を工夫した授業に努めていただきたい。

【本教材の活用の仕方について】

本教材は、「教材」と「プランニングシート」から構成している。電子データによる配布とされているため、授業での活用に当たっては、担任等による印刷や配布だけでなく、教材データを書く先生方や子どもたちのタブレットにダウンロードして活用することが可能。

「教材」の活用においては、電子データとしているが、黒板とタブレットのハイブリッド授業を推奨している。本教材に掲載している5つの教材の対象学年は、小学校低学年、小学校中学年、小学校高学年、中学校一年生そして中学校二、三年生とし、児童生徒の発達段階に合わせて作成した。また、各教材に出てくる挿絵等についても添付しているので、黒板への掲示等でも適宜活用していただきたい。

また、「プランニングシート」は、本教材を活用した道徳科の授業の進め方として、価値の分析、明確なねらい、中心発問や自分自身をみつめさせる発問（一般化）等、を例示し、具体的に授業をイメージして展開できるようにしている。プランニングシートのひな形も添付しているので、活用していただきたい。

道徳科の指導においては、道徳性を養うために内面的資質である道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることが大切である。本教材で扱う内容項目を確実に把握して、授業に臨み、教師が特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることのないよう、各学校における道徳教育の充実に努めていただきたい。

学校たんけん

【小学校低学年】

きょうは、一年生との はじめての 学校たんけんです。
ぼくは、

（学校たんけん、いやだな。）
と、思いました。

それは、一年生の 学校たんけん のときに
かいだんで はしって ころんで しまい、あんないしてくれ
る 二年生に めいわくを かけたからでした。小学校に入学

したばかりの一年生は、きょうみも たくさんもちますが、
いろいろ よそうも しないこともするので たいへんです。

ぼくは、たんけんを 早く

おわらせようと思い、一年生の

あき子ちゃんに いきたい

ところも きかずに

「体いくかんに いくよ。」

とつれて いきました。

体いくかんに つくと、

あき子ちゃんは 広い 体いくかんに

おどろいたようすで、 まわりを 見まわしていました。目に



ついた ふねを ゆびさして、

「なんで 学校に ふねがあるの。」

と、たずねてきました。 ぼくはへんじを するのが めんど
うで、

「ぼくもしらない。」

と、こたえました。

近くで はなしを きいていた 先生が すぐに やって
きました。

「これはね、このしゃしんのように、 たくさん 雨が ふつ
て、水があふれて じてん車や車が つかえない ときに
つかう ふねなの。 むかし 台風で さってしでも こう

なつたことが あるの。そのときの 子どもたちが書いた手紙も のこされているのよ。」
先生は ふねの 近くに はってあつた ふるい手紙を 読んでくれました。

カスリーン台風の つぎの日の朝、
川の黒い水が とつぜん一かいに
ながれこんできました。
とても こわくて、いそいで
やねの上に ひなんしました。
おうちも 学校も どころで
ぐちゃぐちゃに なりました。



カスリーン^{たいふうご}台風後の様子^{ようす}

学校では、お兄さんとおねえさんが つくえを きれいにす
るのを 手つだってくれました。ありがとうございます。

つづけて先生は、

「水が ひいたあとも だろ

まみれになった つくえや

いすを かたづけるのが

たいへんだったのね。お兄さん

とおねえさんが たすけてくれ

たのね。あき子さんも、お兄さん

と いっしょに 学校たんけんが

できてうれしいね。」



と言いました。ぼくは お兄さんと おねえさんの すがた
を そうぞうしました。すると だんだん はずかしくなっ
てきて、あき子ちゃんの 顔を 見るのが できませんで
した。

しばらく 時間が たったあと、ぼくは ゆうきを出して
あき子ちゃんに たずねました。

「つぎは、あき子ちゃんの
行きたいところを たんけんしよう。

どこに いきたい？」

ぼくは 心が ぽかぽかと あたたかく
なるのを かんじました。



「届け、祭り太鼓」

【小学校中学年】

テンツクテン テンツクテン テケテン テンツクテン

「よし、雄二、よいリズムで太鼓をたたけているぞ。」

お囃子はやしの指さしどうをしてくれる地いきの明日香あすか先生の声がひびく。

今日は、幸手の夏の風物詩である八坂の夏祭り本番前最後の練習である。祭りが明日と
いうことでみんな真けんな表情だ。大太鼓、締しめ太鼓、篠笛しのぶえや鉦かねなど、こきゅうを合わせ
る。

初参加はつさんかのぼくは、周りの大人の人たちにはげまされ、正かくな一打いちだを打ちこむ。親友
の良介りょうすけも必死だ。しかし、このような光景は少し前までのぼくには考えられなかった。

あれは、一年前のことである。祭囃子まつりばやしが聞こえてくる暑い夏にぼくは病室からその音を

聞いていた。ぼくは、小さいころから体が弱く、病気がちで入院をくり返していた。夕方になると祭囃子の稽古けいこの音が聞こえてくる。コロナの感染症拡大防止のため、だれも見まいにこられない。ベッドの上での生活にいや気がさしているぼくは少しイライラしながらも、その囃子に合わせて指でリズムをとる。

それにしても親友の良介はこのところ連絡も来ない。

「ねえお母さん、良介はどうしたのかな。」

見まいはせいげんされているとはいえ、ぼくはイライラしてたまらなかった。

「よくわからないけどお祭りの練習に行っているって良介さんのお兄さんが言っていたわよ。」

良介はぼくの大事な友達なのに見まいのメールもくれないで太鼓の練習。ぼくのことをどう思っているんだ。良介なんかもう友達じゃない。

しばらくして、病院から一時退院のきよかが出て家に帰ることができた。帰るとぼくは、商店街に夏祭りを見に行った。ちょうど良介が山車だしの上で太鼓をたたいているところだった。全身あせびっしりになりながら、一生けんめいたたいている。



(ぼくのことよりも太鼓に夢中だなんて。)

必死にたたいている良介の気もちが気になってしかたがなかった。

次の日、久しぶりに登校した教室の前で良介にばったりと会ったので昨日考えたことを聞いてみた。すると、

良介はぼそつと答えた。

「じつは雄二のためにがんばっているんだ。」

「え……。ぼくのために……。」

良介の話は続いた。

「じつは、お母さんから雄二の入院のことを聞いていたけど、コロナのためにお見まいにも行けない。それに夜のメールのやりとりは、からだにもよくないとお母さんに言われてさ。そこで今年は雄二に毎日太鼓の音で元気をとどけようと思って練習していたんだ。」

ぼくは真っすぐに良介を見ることができなかった。

(良介はぼくをはげますために練習してくれていたのか。それなのにぼくは……。)



ぼくはしばらくだまりこんでしまった。

「来年はぼくもお囃子の練習を見に行っていきたいかな。」
ぼくは良介に小さな声でたずねてみた。

「地いきの役員の人にも話してみるよ。八坂の夏祭りは、三百年くらいの歴史があってね、毎年だいにひきつがれているんだ。いっしょにやろうよ。そのかわり、礼ぎや約束もきびしいぞ。」

良介は笑顔で答えた。

そして一年後。ぼくは病院の先生から許可をいただき、良介と一緒にお囃子の練習をしている。
テンツクテン テンツクテン テケテン
バチをもつぼくたちの手は、あせでびっしょり
になっていた。よし、明日は本番！二人の
こきゅうもバッチリだ。



(注釈) 八坂の夏祭り やさか

八坂の夏祭りは三百年近い歴史と伝統をほこり、幸手の夏を熱気でつつみこむお祭りである。毎年七月の第三週日曜日の夕方には、「花山」と呼ばれる立派な山車の曳回しが行われ、駅前を駆け上がる勇敢な姿には、毎年大きな拍手と歓声が送られる。



温暖化は、ぼくのせい？

【小学校高学年】

ぼくの妹は、恐竜きょうりゆうが大好きだ。図鑑ずかんをすみずみまで読んでいる。夏休みに恐竜の出てくる映画や恐竜博物館に何度も行ったことがあるのは、そのせいだ。

「発掘はくつがしたい」

と今日もぼくに言ってきた。

「化石なんて、簡単にできるものじゃないよ。」

とぼくは言ったけれど、そう簡単にあきらめる妹ではない。

「お母さん、今度、発掘に連れて行って。」

と妹が、夕食の準備を始めている母に言った。母は、

忙しそうにしながら、

「そんなことより、テレビを見ていないなら、消しなさい。」

それに二階の電気も消してきたの。」

と怒ったように言った。話の続きをしたい妹は、急いで電気を消しに二階に上がって行っ



た。ぼくは、うるさいなあと思いつながら、テレビの画面を、ただ、ながめていた。妹がもどってきたのを見て、

「このあたりも発掘作業があったのよ。海だったのよ、この辺りは。」
と母が思い出したように言った。

「え、埼玉県には、海はないよ。」

とぼくは、間違いを正すように言った。すると母は、幸手市郷土資料館で聞いた話をしてくれた。

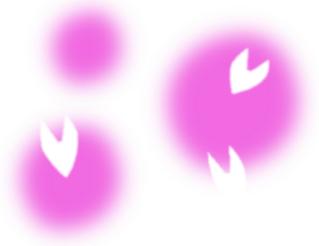
「今、住んでいる幸手市榎野地は、過去に発掘調査があったのよ。その時に、住居のあとと貝塚が発見されたの。貝塚からは、アサリ、マガキとか、かなりの量の貝がでてきたそうよ。その中に、カエルや魚の骨も一緒に見つかったみたい。縄文時代のものだそうよ。」

妹は、カエルの骨と聞いて目を輝かせていた。貝の種類から、潮干狩りができるくらいの浅せの海の近くだったようだ。近くの杉戸町とは、違う貝が見つかったことから、当時の地形も推測されるようだ。そして、

「何で、海がなくなつたのかな。」

と不思議に思つて思わずつぶやいた。妹も考えていたのか、

「恐竜が絶滅つしたみたいに、いん石がぶつかる、海がなくなつちやうなあ。」
と言つた。



「ううん、いん石とかじゃないみたい。今から約一万年前から、今と同じで温暖化が進んだみたい。海面が、今より、二、三メートルも高くなったんですって。茨城県の古河市付近まで海と考えられるんだそうよ。うちの一階がすっぽり海の底になっちゃうって思ったから覚えているのよ。」

と、母が、話してくれた。

「じゃあ、なんで、今は、海がなくなっちゃったの？」

ぼくが言おうとしたことを妹が聞いてくれた。

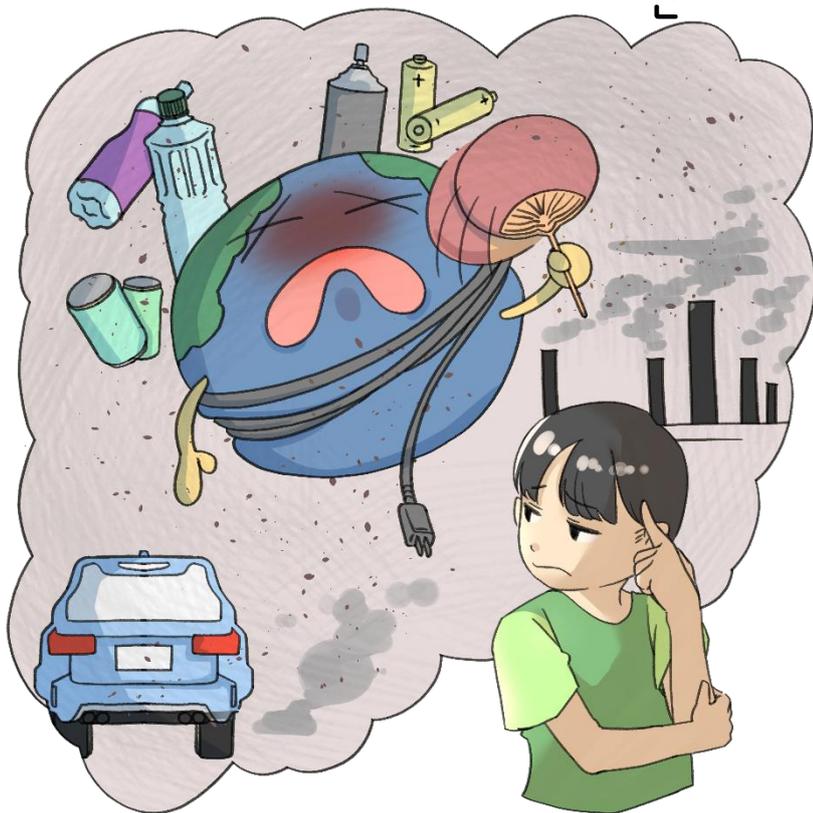
「その後、寒冷化って行って、また寒い時期がきて、
どんどん海面が下がっていったそうよ。だから

埼玉県には、海がなくなったのね。」

「そうか。暑くなかった後に、寒くなったのね。」

と妹は、納得したようだった。でも、ぼくは違った。

今言われている温暖化は二酸化炭素とかオゾン層が関係していると聞いている。昔は、電気もないし、自然がいっぱいあったはずだ。地震や火山のふん火みたいな自然災害で地形は変わるけれど、今の温暖化は、自然災害なのかな。それとも人間のせいなのかな……。



次の日の昼休み、暑さのせい、外に行くことが禁止になった。業間休みにドッジボールの続きをやるはずだったのに、教室で過ごさなくては、いけなくなつた。

「全部、温暖化のせいだ。猛暑もつしよのせいで、ぼくたちの楽しみがうばわれるんだ。温暖化が悪い。」

と、くやしくて叫んでみた。すると、近くにいた女子たちに、

「何、言ってるのよ。電気当番なのに、電気を消すのを忘れていて、注意されていたのは、だれですか?」

「図工の時間に先生に、ごみを分別してなくて、

注意されていた人もいたね。」

と言われてしまった。

「まったく、温暖化は、だれのせいなんでしょうね。」

と付け加えてくる女子。いつもなら、言い返す**ぼく**だが、

「温暖化は、ぼくのせい?」

という思いで、いっぱいになってしまった。



【道徳の窓】

ふるさと幸手に俳句の文化を

ひろめた中野三允に学ぶ

ふるさと幸手だけでなく、全国に俳句を広めようとし

ていた中野三允とはどのような人物なのでしょう。三允

の俳句を詠んで、それぞれの景色を思い浮かべながら

鑑賞してみましょう。



[華厳の滝を背景にした中野三允]
[肖像写真] (大正 12 年、44 歳)

【俳句と出会い、俳句を広める】

三允は今から、約百五十年前の明治十二年に、幸手市で代々薬屋を経営していた家に生まれました。当時の幸手は東京から日光や東北地方への街道として人々の行き来が多い町で、東京での出来事が身近に感じられる町でした。三允の父も祖父も俳句に親しむ家庭で、幼いころから、三允は、各地の新しい文化や出来事に接する機会の多い生活をおくりました。

そんな三允は東京で学ぶ事をこころざして、東京の早稲田大学に進学して、薬剤師の免許を取りました。大学で俳句に興味をもち正岡子規と出会いその弟子として俳句を学びました。

俳句は五・七・五の十七音と春夏秋冬を表す〈季語〉という言葉で身の回りの景色から感じたことを表現する文芸です。この俳句を新しい明治の世の中に広めようとなりました。そして、小説家の尾崎紅葉などと早稲田大学に『早稲田俳句会』を作りました。その後、埼玉県にも俳句の文化を広めようとして、行田や川口などの俳句仲間と協力して、埼玉県で初めての

『アラレ』という俳句誌を作りその責任者となりました。



[中野三允和服姿] [肖像写真]
(昭和6年、52歳)

【俳句を日本全国へ】

そのころ、同じく正岡子規の弟子であった高浜虚子が『ホトトギス』という俳句雑誌を作り、全国に俳句を広めようとしていました。その運動に三允も加わり、全国から集まる俳句を選ぶ責任者として、俳句を日本全国に広める先頭に立ちました。

その一方、薬剤師としても、全国の薬剤団体の役員や、罪を犯した人が、立派に立ち直り活躍できるように支援する保護司等

の仕事にも取り組みました。

【ふるさと幸手に俳句の文化を広めたい】

昭和二十年に太平洋戦争が終わりましたが人々の心は戦争で疲れ、毎日の食べ物にも大変な時代がしばらく続きました。そんな中、三允は「俳句を通して、戦争で失った平和で穏やかな暮らしを早く取り戻し、幸手の人々の心を少しでも明るくしたい。未来へ希望をもてるようにしたい。俳句は鉛筆と紙と辞書があればいつでも、誰でも、どこでも、作れて心を豊かに出来る文芸なのです。」との強い思いをもち、町の公民館での指導を始めました。

三允は初めて俳句を学ぶ人にも分かり易い言葉でそれぞれの人の個性を大事にした俳句講座や俳句会を通して、お隣のごか、くきなど、まちひとびとよ、五霞、久喜等の町の人々にも呼びかけ、俳句を広める活動をボランティアで続けました。

【今も引き継がれる三允の思い】

三允が幸手に俳句を広める種をまいてから七十年余りが経ちました。幸手市の権現堂堤で毎年開催される〈桜祭り〉では俳句コンクールが開かれ、故郷幸手を詠んだ優秀な俳句には「三允賞」が贈呈される等、三允がまいた種とふるさと幸手を愛する思いは、幸手の新しい伝統として今も引き継がれています。



〔幸手町別荘での中野三允〕〔肖像写真〕(明治41年、三允29歳)

【やさしく分かりやすい三允の俳句】
身の回りの様子をやさしく、分かりやすい言葉でつくられた俳句です。様子を思い浮かべて鑑賞してください。

○故郷幸手での身近な出来事を詠んだ作品とその意味

雛の間の障子あくれば筑波山

お雛様を飾っている部屋の障子をあけると東の空に筑波山が見えた。山も子の成長を祝っているようだ。季語〈雛〉季節〈春〉

故郷のつくつく法師声なじみ

高浜虚子と自宅で俳句会をしていたらつくつく法師が鳴いていた。懐かしい故郷の鳴き声でした。季語〈つくつく法師〉季節〈秋〉

霧晴れ来権現堂巡礼碑

霧が晴れてきて、権現堂堤の巡礼碑にきた。権現堤を大水から守った巡礼の親子の願いが今も生きていられるのかもしれない。季語〈霧〉季節〈秋〉

梅落ちて今日の守部の忌歌欲しや

江戸時代に橘守部と言う立派な学者が幸手で、多くの弟子を育てた。その人を讃える和歌が是非欲しいものだ。(幸手桜高校の北側に、守部が住んだ場所の看板があります。) 季語〈梅〉季節〈春〉

故郷の駅の広場の踊りの輪

昭和四年に幸手駅が出来た。町のみんなが、駅が出来て駅前広場で町が栄えることを祝いしている。季語〈踊り〉季節〈秋〉

○子ども生活の様子を詠んだ作品とその意味

宿題が解けず柿食う兄に聞く

宿題を考えてもなかなか分からない。柿を食べているお兄さん「これ教えて」と聞いてみたら、答えが分かった。季語〈柿〉季節〈秋〉

子は顔を水にうつして目高釣り

目高つりをしている子は水の上すれすれに顔を近づけて、必死に水の中の目高を見逃さないようにしている。季語〈目高〉季節〈夏〉

ストローの終わりの音やソーダ水

ストローでソーダ水を飲んだ。甘くておいしいのでストローがずるずるするまで一気に飲んでしまった。季語〈ソーダ水〉季節〈夏〉

凧あげてかけあがりたる堤かな

凧上げに権現堂堤に行った。風に向かって、堤を駆け上がったら、堤の上の風に乗って凧が大空へあがった。季語〈冬〉季節〈冬〉

草餅の写生の絵の具草の色

子が草餅の写生をしている。絵の具をよく見ると、本当の草のよう

に色を混ぜて工夫していた。食べたくなるようだ。季語〈草餅〉季節〈春〉

書初めに置く神童の手形かな

書初めをしている。子がいたずらで手に墨を付けて手形を押し。その手形を横に置いて字を書いている。季語〈書初め〉季節〈新年〉



[講演中の中野三允] [肖像写真] (明治33年、三允21歳頃)

一株のあじさいから

【中学校第一学年】

「はあ、ごみ拾いの時間、早く終わんないかなあ。」

今日は、月一回のクリーン作戦。僕たち陸上部が、朝練の時間に学校の周りのごみ拾いをする日だ。学校周辺には、細々としたごみがたくさん落ちてている。クリーン作戦直後はきれいになるが、一か月するとまた元のとおりに……。隣にいる健太はすごく熱心に取り組んでいるが、ぼくは身が入らない。

「健太、よくそんなにごみ拾いができるな。」

「だって、ごみを拾ってその場所がきれいになると、達成感があるじゃないか。」

「そうかなあ。ちょっと拾っても、また誰かごみを平気で捨てるじゃないか。これって意味あるのかなあ。」

「でも、一人一人が拾えば、またきれいになるだろ」



そういう健太の顔は、すがすがしい。健太の言うことは分かるが、僕はどうしてもそういう気にはなれない。

そういうえば、同居しているじいちゃんは、「権現堂桜堤保存会」に入って、一生懸命、権現堂堤のごみ拾いや花の手入れをしている。

「もう年なんだから、無理しないほうがいいんじゃない。」

と心配して声をかけるが、じいちゃんはきまって、大丈夫だ、と言って聞かず、定期的に保存会の活動に出かけていく。僕は小学生の頃に、ごみ拾いの活動に連れていかれたことがあるが、その活動がいやでしょうがなかった。最近、じいちゃんはよく「腰が痛い」と訴え、体も

「くの字」に曲がってきた。なぜ、腰が痛いのにそこまでごみ拾いや花の手入れをしに行くのか、僕にはよくわからない。

学校から帰ると、じいちゃんはいつものようにいすにどっかりと腰掛け

夕方ニュース番組を見ていた。僕は、かばんを置きながら、

横目で何気なくニュースを見てみると、そこには、どこかで見た風景が映っていた。

「あっ、権現堂だ。桜の季節でもないのに、なぜ権現堂が……。」「どうやら、「あじさいまつり」を特集しているようだ。」

「桜以外にも、権現堂がこんなに注目されてるんだ。」



僕がそうつぶやくと、さらに、驚くべき映像が目に入った。なんと、一瞬ではあるが、じいちゃんが映ったではないか。それは、保存会の人たちと、あじさいの手入れをしている様子だった。

「今、じいちゃんが手入れしてたあじさいなあ、元々はうちの庭で咲いていたあじさいなんだぞ。」
じっとニュースを見ていたじいちゃんが口を開いた。

「えっ。」

僕は、どういうことかわからなかった。確かに、うちの庭には昔からあじさいが植えてある。

「あれは、もう二十年以上前になるかな。権現堂にあじさいを植えようって話になってなあ。うちに咲いているあじさいを一株分けて植えたんだ。その株を毎年丁寧に手入れしたら、どんどん育ってなあ。立派になっただろ。」

「権現堂といったら、桜でしょ。なんであじさいを植えようなんてことになったの。」
そんな疑問を投げかけると、じいちゃんが、ゆっくり語り始めた。

「権現堂はなあ、昔から桜が有名で、春には多くの人でにぎわったんだ。そして、夏には蛍が飛んでたし、きれいな小川でさんざん遊んだんだ。俺の小さいころは、いつ行ってもいい場所だった。」

「ふうん。そうだったんだ。」

「だけどなあ、しばらく経つと、権現堂は、だんだんと春以外は草ぼうぼうで荒れるようになってしまったんだよ。ごみものすごく多くてなあ。とてもじゃないけど、みんなが来たいと思う場所じゃなくなってしまったんだよ。」

「そんなひどくなっちゃったの。」

「うん。それが寂しくてなあ。俺の仲間も同じ思いだった。そこで考えたのが、『あじさい』を植えることなんだ。必要になってくるお金もほとんどなかったから、いろんな人があじさいを持ち寄ってな。その一つが、うちのあじさいなんだよ。」

「うちのあじさいが、権現堂の役に立っていたんだ。」

「知ってるか？桜だって、戦争中に切り取られて薪として使われてしまったんだ。それをなあ、戦後、俺のおやじたちが桜を一本一本植えて復活させたんだ。俺らもちょっと頑張ってみようと思ってるなあ。」

初めて聞く話ばかりだった。亡くなったひいじいちゃんは桜を植え、そして、じいちゃんは、うちのあじさいを植えて、権現堂で育てていたなんて……。

「そこで、『権現堂桜堤保存会』をつくって、本腰を入れて

『昔の権現堂を取り戻そう』って活動し始めたんだ。みんなで

ごみ拾いをしたり、※まんじゅしやげ曼殊沙華や水仙、最近ではひまわりまで

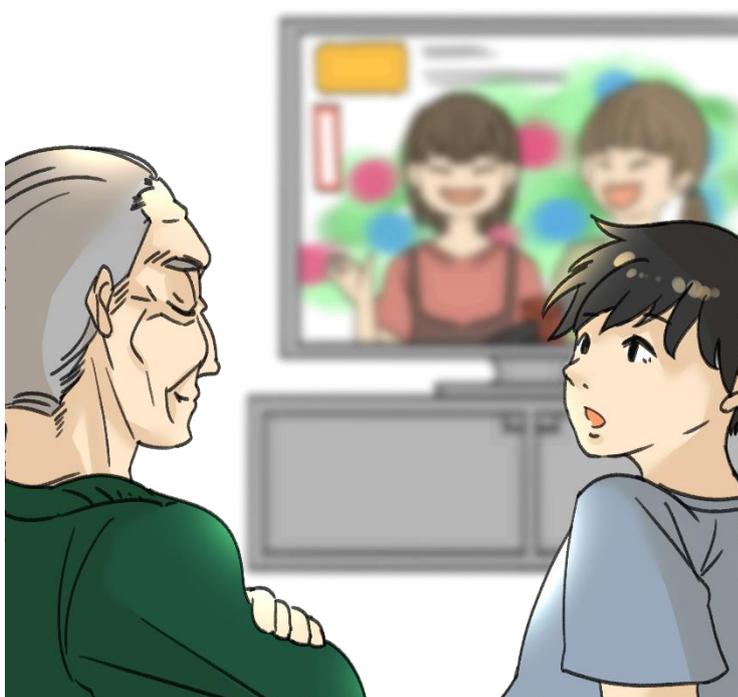
植えたりしてな。」

「そんないきさつがあったんだ。」

「そうだよ。桜にも寿命があって、今では伐採しなきゃいけないのも出てきた。だから、『保存』だけじゃなくて、未来に向けて

『再生』もしていかないといけないって話し合ってるんだ。」

普段はめったに自分から話すことなんてないのに、いつになくうれしそうに語っている。テレビには、あじさいを見に来た観光客の笑顔が映し出されている。



※曼殊沙華…彼岸花のこと

「うちのあじさいを一株分けて植えるのなんて、庭いじりが好きな俺からすれば、何てことないことだった。正直、植え始めた頃は、あじさいがこんなに注目されるようになるとは思わなかったよ。ごみも、一人一人が拾ったお陰でだんだん減ってきた。昔のようなきれいな権現堂になってきたよ。」

画面の中の観光客の笑顔を見て、いつも無表情なじいちゃんにも自然と笑みがこぼれる。

じいちゃんが、桜堤保存会の活動に一生懸命になる理由が、少しだけわかった。

ふと、健太の「一人一人が拾えばきれいになる」という言葉を思い出す。じいちゃんの思いも健太の思いも、ひいじいちゃんの思いも、どうも重なる部分があるような気がしてきた。

自分の家族が植えた桜とあじさい、そして、自分たちがきれいにした街並み。未来に向かってそれぞれが美しく輝く。そんな光景が僕の頭の中に広がり、少し誇らしい気持ちになる。今度、保存会の活動に久々に参加してみようか……。何気なく過ごしてきた自分の住む地域が、今までとは何だか違うものとして僕の心の中に浮かび上がってきた。



あかね色の空

【中学校第二、三学年】

「『平和』や『戦争』という言葉聞いて、どんなことが思い浮かぶかな。」という先生の問いかけ。

幸手市では、中学三年生になると平和について学び、作文を書く学習を進めている。作文が入選した生徒は広島に行つて、平和の式典に参加することができる。私は考えただけで興奮してきた。広島のしまなみ海道の景色も見てみたいし、純粹に選ばれたと思った。先生の問いかけの後、みんながそれぞれ自分の意見を話し始めた。

「『平和』って、戦争がない世界のことじゃないかな。」

「おじいちゃんやおばあちゃんから戦争の話聞いたことがあるな。今の時代とは違って、物がなくて大変だったみたいなんだ。」

「今は逆に恵まれているというか、物があふれていて、便利な世の中だね。」

私は戦争体験のある祖父の話を子どものころ聞いたことがあったが、今ではよく覚えていない。先生はみんなの意見を聞いた後、真剣なまなざしで私たちを見て、話を始めた。

「実は、みんなと年の変わらない子どもたちにも、戦争の影響があったんだよ。」

考えてもいなかった言葉を聞いて、私は自然と背筋を伸ばしていた。先生は話を続けた。

「『学童疎開』という言葉聞いたことがあるかな。太平洋戦争の時に、都会から親と離れて小学校三年生から六年生の児童二百八十人が、この幸手に避難してきたんだよ」

「えっ、この幸手に。どうして、親と離れなければならなかったんですか。」

「当時東京は空襲があつて、命の危険にさらされる状況が続いていたんだね。そこから子どもだけでも避難させようと疎開が行われたんだ。」

この幸手市にも疎開してきた子どもたちがいたなんて、初めて聞くことだった。

「幸手市郷土資料館に当時の貴重な資料があるみたいだよ。行って見たらどうかね。」

「ねえ、咲ちゃん、一緒に行ってみない。平和の作文を書くヒントが見つかるかなと思っっているんだけど。私は親友の咲ちゃんを誘ってみた。」

「いいよ。土曜日に部活が終わったら行ってみよう。」

部活動が終わった後、私たちは郷土資料館に自転車を走らせ、館長さんのお話を聞くことができた。

「学童疎開をした児童たちは、幸手の聖福寺、正福寺、担景寺、宝昌寺、朝萬旅館で生活していたんです。『幸手町のかたりべ』という音声が残っているので、聞いてみますか。」

その音声から、当時の様子を、低い声で語る女性の声が部屋に響いた。女性の声には、感情がこもっていて、どこもなく悲し気にも聞こえた。私たちは、次はどうなるのだろうという気持ちにかきたてられながら『幸手町のかたりべ』を聞きすすめていった。低い女性の声は、学童疎開してきた子どもたちの様子を語っている。子どもたちが教室に入れなかった理由の一つは、貧しくてお弁当をもってこらなかつたということ。工場まで自転車で一時間かかる道をこいで行き、働いても、働いても苦しい生活を強いられていたこと。みんないつかは故郷に

帰って親に会えることを信じていたが親は戦死して二度と会うことはなかったこと……。

当時の小学生たちの様子が私の頭の中に、白黒の絵となって入ってくる。その絵は、私の頭の中にしばらくとどまりつづけた。

ふと、隣にいる咲ちゃんを見ると、咲ちゃんの肩が震えていた。

「咲ちゃん、どうしたの。」

「なんだか、胸が苦しくなっちゃって。」

そう言いながら、咲ちゃんのほおには涙が流れていた。

私は咲ちゃんの涙のわけがどことなく分かっていった。

「私たちはその頃の子もたちに比べると恵まれている

のかもしれないね。今の時代に生まれてよかったね。」

声をかけたが、私たちの会話を黙って聞いていた館長さん

の曇った表情が、私の心に引っかかっていた。

帰りがけに、館長さんが「幸手市史」の資料を見せてくれた。

「当時の子どもたちは戦争中でも懸命に生きていたんですよ。」

そう言って館長さんは、何枚か写真を見せてくれた。

「当時の子どもたちが、昼間に楽しそうに遊んでいる写真です。みんなの顔がとても明るくていいでしょう。」

その笑顔は本当に楽しそうで、みんなで相撲をとったり、仲良く一冊の本を読んだりしている写真であった。館



長さんは続けて話してくれた。

「今がどれだけ恵まれているか、ということを考えるより、昔の子どもの生き方を肌で感じることで、きっとこれからの生き方も変わってくると思いますよ。」

「昔の子どもの生き方ですか。」

「食べ物や労働でどんなに苦勞しても、自分の生まれた家に帰れると信じて、懸命に生きてきた子どもたち。防空壕に避難したり、爆弾の落下音に驚かされたりしながらもお互いをいたわり合っていた子どもたち。自分の親が戦死したと知らされて、これからどうやって生きていけばいいのか考えられなくなった子どもたち。そういう状況の子どもたちも前向きに力強く一生懸命生きていたのですよね……。そして表情がこんなに明るい。」

館長さんは一通の手紙も見せてくれた。

そこには一人の少女が東京大空襲で家を焼かれ、別の場所に疎開した母親に送った手紙であった。子どもたちが戦時中つらい精神状態の中で、全力で困難に立ち向かい、生活していた中で、それでも母親を気遣い、自分もがんばっているから、お母さんもそちらでお仕事にはげんでくださいと、自分の決意を述べる心情が書かれていた。私は当時の女の子の思いを目の当たりにし、不思議と胸が熱くなってくるのを感じた。

（そんな苦しい状況の中でも、負けることなく前向きに強く生きていたんだ……。）

「百合ちゃん、帰るよ。」



私は、咲ちゃんの声ではっと我に返った。

すると、館長さんが私たちの方を見て微笑んでいた。

その笑顔が先ほど見せてもらった写真と重なって見えた。

「今日は幸手で戦争中の子ども生き方について考えることができ、本当によかったです。私は、その子どもたちの思いを伝えるために、平和の作文を書いてみようと思います。」

私たちは館長さんにお礼を言って、郷土資料館を後にした。

川沿いの道を家路に向かう。私の目には一面の田んぼが映る。

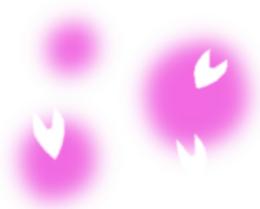
(戦争中の子どもたちも、この同じ景色を見ていたのかも。

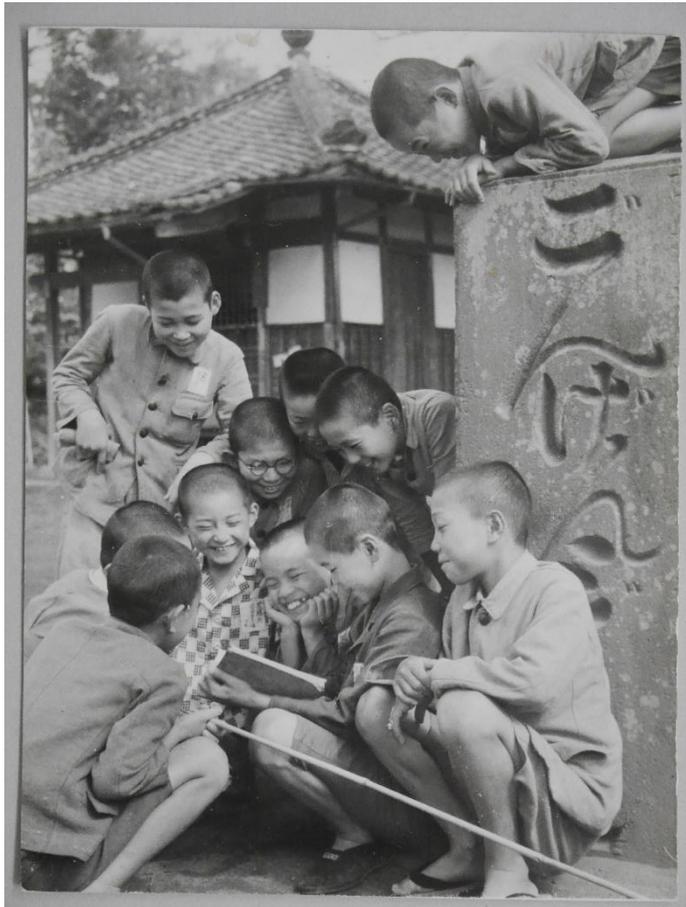
生きるって何だろう。)

目の前に広がるあかね色に染まった田園風景を見つめながら、

私はもう一度写真の子どもたちの笑顔を思い出した。そして家

に向かって、力強く自転車をこぎ始めた。





疎開先での学童の様子1



疎開先での学童の様子2

(注釈) 学童疎開

戦争の戦局の悪化に伴い、戦禍を避けるために、学童を地方都市や農村に集団的または個人的に移住させたことを言います。疎開学童たちは、初めは疎開先の人々の親切もあって、親元を離れた寂しさを忘れ心とむ日々もあったが、やがて食糧事情が悪化し、空腹や寒さ、ノミ、シラミに耐える生活が続いたとされています。

幸手市郷土教材資料
道徳のまち さってー未来を生き抜く子どもたちー

発行：幸手市教育委員会学校教育課
幸手市郷土教材資料作成者会議

編集：幸手市教育委員会学校教育課

編集協力：幸手市郷土教材資料作成者会議委員

監修 常見 昌弘（玉川大学客員教授）
委員長 岸 千里（幸手市立さくら小学校長）
副委員長 山本 直人（幸手市立幸手中学校 教頭）
委員 瀧田 俊介（幸手市立幸手小学校 教諭）
委員 藤原 祐介（幸手市立上高野小学校 主幹教諭）
委員 三ノ輪 真人（幸手市立吉田小学校 教諭）
委員 高橋 有希（幸手市立さくら小学校 教諭）
委員 清水 美津子（幸手市立東中学校 教諭）

協力：小林 弘和（人権擁護委員）

原 太平（幸手市郷土資料館長）

挿絵協力：Hills ILLUSTRATION 代表 坂齊 諒一

資料提供：さいたま文学館

幸手市郷土資料館

事務局：幸手市教育委員会学校教育課

令和5年2月発行

発行元住所：埼玉県幸手市東4-6-8

発行元電話：0480-43-1111（代表）

ホームページ：<http://www.city.satte.lg.jp>



幸手市マスコットキャラクター
さっちゃん

学校名	幸手市立	学校
氏名		